小樽ジャーナル　令和元年７月４日

ナホトカ市少年少女バスケ使節団　小樽訪問で親交と練習試合

2019/7/4　スポーツ・教育, 市政・市議会, 文化・歴史・芸術

ツイー　いいね！0　シェア　B！0　Pocket 0　LINEで送る

小樽市と姉妹都市であるロシア連邦ナホトカ市から、少年少女バスケットボール使節団(ナホトカバスケットボール連盟)のルドーイ・ドミートリー・アレクサーンドロビッチ会長ら13名が、7月3日(水)から8日(月)までの日程で来樽した。

滞在中は、商大生本気プロとの交流や潮陵高校学校祭見学、市内中学生とのバスケットボール交流試合を楽しむ予定。

初日に市長表敬訪問を予定していたが、飛行機の遅れで、4日(木)9:30に延期となった。

市役所本館(花園2)玄関から2階の市長応接室まで、迫俊哉市長をはじめ、職員約150名が拍手で出迎え、旗や横断幕を掲げて歓迎ムードを高めた。

同使節団は、同会長、ナホトカ市立青少年スポーツ学校ジュニア教員のラマーディナ・エレーナ・ペトローブナさん、通訳のマスレハ・マリーナ・ミハーイロブナさんが引率し、12～14歳の女子1名を含む10名で構成。

市からは、迫市長・小山秀昭副市長・日栄聡総務部長・笈田裕俊日本ユーラシア協会小樽支部長らが出席。高橋匠美さんが通訳を務めた。

迫市長はロシア語で、「ナホトカ市は私にとって第2の故郷であり、レーニン通り・ナホトカ湾・シスター山など、とても気に入っている。何より、優しいナホトカ市民を愛している。ウラジオストクと札幌の直行便を使った初めてのお客さまとなり、札幌と小樽で4試合の交流試合を予定し、若い親善大使として、日本の同世代と交流を深めてもらうことを期待している」と述べ、強い歓迎を示した。

同会長から、グラドキフボリスナホトカ市長の手紙を代読。「スポーツ交流のお陰で、両市に若い世代が親善関係を発展させ、友情と協力を強化。このような体験は、少年スポーツの水準が高まると同時に、参加する子ども達の心を広げる手段となる。両市の親善関係は、将来さらに発展しながら強まることを確信する」と書かれていた。

記念品交換で、市はガラスの花瓶、ナホトカ市からも工芸品の花瓶が手渡された。両出席者には、お互いチョコレートが贈られた。

同使節団に迫市長が加わり、ロシア民謡「カチューシャ」をロシア語と日本語で歌い、和やかな雰囲気に包まれた。

1966(昭和41)年、当時の安達与五郎市長がナホトカ市へ出向き、姉妹都市提携を結んだのが始まりで、2016(平成28)年には、姉妹都市提携50周年を記念して、ナホトカ市長を団長とする代表使節団5名とロシア伝統楽器ナホトカ市立交響楽団15名の計20名が来樽し、その後も、交流を続け親交を深めてきた。

少年少女使節団との交流は、1978(昭和53)年に小樽市から児童会役員がナホトカ市訪問をきっかけに、継続的に交流を続け、2015(平成27)年7月に14～16歳の男子バレーボールチームが来樽し、2017(平成29)年8月に中学生バスケットチームが訪問している。

今年10月には、迫市長を団長とする使節団が、ナホトカ市訪問を予定している。

一行は、おたる水族館見学や5日(金)の商大生本気プロと交流、浴衣の着付けや日本語レッスン、運河クルーズ乗船を楽しみ、6日(土)は潮陵高校祭、樽川中学校でバスケットボール練習試合、7日(日)は青園中学校で、北陵中学校や長橋中学校とのバスケットボール交流試合を行い、8日(月)に帰国の予定。

小樽ジャーナル　令和元年７月５日

ナホトカ少年少女使節団　本気プロと交流

2019/7/5　スポーツ・教育, 市政·市議会, 文化・歴史・芸術

ツイー　いいね！7　シェア　B! 0　Pocket 0　LINEで送る

小樽の活性化を本気で考える小樽商科大学本気プロ2019冬「ロシアとの交流による小樽の活性化」チーム(村田優斗・鳥本晴也・佐藤遥・松本隼輝・島田ニコラ)は、来樽中のロシア連邦ナホトカ市少年少女バスケットボール使節団13名と、7月5日(金)13:00から、ロシア語が堪能で文化に詳しい高橋匠美氏が代表を務めるT.T.T.アブロードアカデミー(国際文化交流事業推進団体)のバレエスタジオで、日本文化に触れる催しを行なった。

高橋氏は、同チームと今年3月からロシア人向けの観光フレーズ集の制作に取り組み、同使節団との交流についても協力している。

きものレンタル着付け「おたる小町」の五十嵐佳枝代表とスタッフで、使節団13名の浴衣の着つけを行った。

初めて身につける浴衣に、最年少のサーリン・ニキータ君(12)は、「かっこ良く素晴らしいけど暑い。テレビで見たことがある。着心地が良いが足が上げられない。母や友達、みんなに見せたい」と笑顔で話し、皆で折り紙やけん玉を楽しんだ。

本気プロが作成した同観光フレーズ集を配布し、日本語会話レッスンを始めた。「はじめまして」や「小樽駅はどこですか？」など、商大生の発音に習って日本語を繰り返した。

日本を覚えてもらおうと、2つに分かれてカルタ大会が始まった。20種類の日本語カードが読み上げられ、身を乗り出してカードを取ろうと真剣になり、白熱した大会が繰り広げられ、会場は熱気に包まれた。

1枚でも多く取ろうと頑張ったラジミール・ガルーチ君(13)は、「僕は頑張ったけど全然カードが取れなかった。日本がとても気に入っている」と満足した様子だった。

島田ニコラさんは、「みんな元気にカルタを楽しみ、簡単な言葉を覚えてくれた。目標は達成できたと思う」と話し、本気プロを支えるプロジェクト ディレクターの高野宏康氏は、「初めてなので、カルタが心配だったが、盛り上がり良かった。高く評価したい」と話した。

その後、浅草橋で記念撮影をしてから、中央橋で運河クルーズに乗船して景色を楽しみ、夕食に手巻き寿司を味わった。

6日(土)は潮陵高校学校祭を見学し、7日(日)は市内中学校でバスケットボール交流試合を行う予定。